

(研究ノート)「伝統的な言語文化」に親しむ授業のあり方について

—小・中学校国語科を中心に—

松村 美奈 (非常勤講師)

0. はじめに

平成20年度、文部科学省が小学校・中学校学習指導要領改訂をおこない、23年度には完全施行された。「国語科」改訂の要点として特に注目すべきは、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」という点である。従来「読むこと」の配慮事項に示されていたものが、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「伝統的な言語文化に関する事項」として設定された。学習指導要領解説¹には次のような説明がある。

「伝統的な言語文化に関する事項」は、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けさせ、言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることに重点を置いて構成している。言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。今回の改訂では、伝統的な言語文化

に小学校の低学年から触れ、中学校においても引き続き古典に親しむ態度の育成を重視している。

上記の事項を見ると、「古典に親しむ」事が重要視されていることがよく分かる。しかし、教育現場、特に小学校での指導は、まだ手探り状態といってよい。伝統的な言語文化指導はまだ始まったばかりであり、授業開発や実践研究なども過渡期である。例えば、「現在の国語科教科書では、昔話教材の位置づけは部分的断片的であり、系統性・汎用的な学習の観点も希薄と言わざるを得ない。読み聞かせを聞く、感想を述べ合う、好きな場面の紹介(音読)等の言語活動中心の学習が多く配当時間も極めて短い。」²等の指摘もあり、「古典に親しむ」教材開発においてもこれから試行錯誤が続くと思われる。

こうした現状を受け、教職課程を履修し、教員を目指す学生たちも必然的に「古典に親しむ」学習について、再考しなくてはならないだろう。

本稿では、現在使用されている教科書単元を整理することで、教職課程の「国語科教育」において、「伝統的な言語文化」に関する指導をどのように行うべきかを考える前提としたい。

1. 学習指導要領の求める古典指導

小・中学校における古典の指導について、

学習指導要領³には以下のように示される。

[ア伝統的な言語文化に関する事項]

〈小学校第1学年及び第2学年〉

- (ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

〈小学校第3学年及び第4学年〉

- (ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

- (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用語、故事成語などの意味を知り、使うこと。

〈小学校第5学年及び第6学年〉

- (ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

- (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

〈中学校第1学年〉

- (ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

- (イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

〈中学校第2学年〉

- (ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。

- (イ) 古典に表れたものの見方や考え方に

触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

〈中学校第3学年〉

- (ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

- (イ) 古典の一節を引用するなどして古典に関する簡単な文章を書くこと。

上記の解説を見ると、古典に「親しむ」「楽しむ」ことを重点的に指導することを奨励していることが分かる。しかし、ここで一つの疑問が浮かぶ。指導する教員自身は、どれだけ古典に「親しみ」「楽しむ」体験を持っているのだろうか。

おそらくどこの学校現場においてもこうした疑問を抱いたまま、学校教員はとまどいつつも、毎日授業を作り上げているはずである。そのような状態で授業を展開するのは大変な労力を要する。だからこそ、大学時代に様々な体験を経しておく必要があるのではないだろうか。「伝統文化」に対する体験も、受身ではなく、自ら探求していかなくてはならないのである。

2. 小学校・中学校の「伝統的な言語文化」に関する教材

ここで、小学校の教科書にどのような単元教材が盛り込まれているのか、以下に整理しておきたい。調査には平成27年度発行 検定教科書教育出版「ひろがる言葉 小学国語」1年生から6年生を使用した。

(小学校)

| 学年 | 単元 |
|-------|--|
| 第1学年下 | むかしのおはなしをたのしもう みずたに「天にのぼったおけや さん」(みずたにしょうぞう) |
| 第2学年上 | 「いろは」をしろう |
| 第2学年下 | 「いなばのしろさぎ」(ふくなが たけひこ) |
| 第3学年上 | 日本語のひびきにふれよう 俳 句に親しむ (小林一茶・与謝蕪村・高野素十・ 山口誓子・松尾芭蕉・正岡子規 中村汀女・炭太祇・黛まどか の句) きせつの言葉を集めよう一春・ 夏一 (松尾芭蕉・橋間石・水原秋桜子・ 高野素十 の句) |
| 第3学年下 | きせつの言葉を集めよう一秋・ 冬一 (星野立子・室井其角・山口誓子・ 田捨女 の句) 日本の文化に親しもう ことわ ぎ・慣用句 |
| 第4学年上 | 日本語のひびきにふれよう 短 歌の世界 (柿本人麻呂・藤原敏行・藤原 定家・良寛・与謝野晶子・石川 啄木 月のつく言葉 |
| 第4学年下 | 〈もみじ〉の歌の読み比べ (菅原道真・能因法師・高野辰之) 日本文化に親しもう 故事成語 (五十歩百歩・漁夫の利・蛇足・ 矛盾・背水の陣・推敲・杞憂) |
| 第5学年上 | 日本語のひびきを味わう 漢文 に親しむ (孟浩然「春暁」・蘇軾「春夜」・ 李白「静夜思」・「論語」「大学」) 〈鳥〉の読み比べ (野口雨情・大伴家持・小林一茶・ 山口素堂 の詩・句) |

| | |
|-------|---|
| 第5学年下 | 日本の文化を考えよう 古典を 楽しむ (『竹取物語』『平家物語』『はと とありのこと』日本の伝統芸能 「狂言」「能」「人形浄瑠璃」「歌 舞伎」) 短歌や俳句を作ろう／子ども句 会を楽しもう (俵万智・志貴皇子・松尾芭蕉・ 柿本人麻呂・与謝蕪村などの歌、 句) |
| 第6学年上 | 日本語のひびきを味わおう 春 はあけぼの |
| 第6学年下 | 回文を作ろう 日本の文化を考えよう 言葉は 時代とともに (山部赤人・柿本人麻呂の歌・ 正岡子規の句・夏目漱石・芥川 龍之介の作品冒頭) |

以下の中学校教科書調査には、平成24年度
発行 中学校国語科検定教科書は光村図書
「国語1」「国語2」「国語3」を使用した。

(中学校)

| 学年 | 単元 |
|-----|---|
| 1年生 | いにしえの心にふれる—古典の 文章に出会い、現代とのつなが りをかんがえる 音読を楽しもう いろは歌 七夕に思う —語り継がれ、読 み継がれたもの 蓬萊の玉の枝—「竹取物語」か ら 今に生きる言葉 故事成語を使って体験文を書 こう |

| | |
|-----|---|
| 2年生 | いにしへの心を訪ねる 昔の人のものの見方や考え方に触れ、古典に親しむ 音読を楽しもう 平家物語 扇の的一平家物語から 仁和寺にある法師—「徒然草」から— 漢詩の風景 人物の特徴をとらえて論じよう |
| 3年生 | いにしへの心と語らう 音読を楽しもう 古今和歌集 仮名序 君待つと一万葉・古今・新古今 夏草—「おくのほそ道」から 古典の伝統 お薦めの古典を贈ろう |

上記の単元教材を概観すると、高等学校「国語総合」で学んでもおかしくないような専門的な教材が並んでいる。特に小学校では短歌・俳句などを多く取り入れ、中学校にかけても同じような歌や句を取り上げ、系統的に学ばせようというねらいもよく伝わってくる。韻文では、万葉集から古今和歌集、新古今和歌集、百人一首など一流の歌集をおさえ、俳句も名だたる俳人の句を鑑賞できるように配置されている。また、「漢文に親しむ」や「古文を楽しむ」など、漢文や古文を小学校5年生以降で読ませる配置である。

こうした教材の指導にあたっての心構えとして『みんなで親しむ「伝統的な言語文化」』（東洋館出版社）には

①発達段階を踏まえた学習の系統性を重視
②生涯にわたって古典に親しむ態度
の2点が挙げられている。⁴

①の解説として、「小学校での指導で、とくに大切なことは、子どもたちを古典嫌いに

させないことである。（中略）古典を学ぶことの楽しさや心地よさに焦点を当てた指導を心がけるようにすることである。」と指摘する。②の解説として「子どもたちに付けたい力を明確にしておくことが重要」とも指摘する。

これらの指摘は全て正しい。しかし、それ以前に、大きな疑問が一つ残る。それは教員自身の「古典に親しむ体験」についてである。和歌・俳句に親しんだ経験がない者が、果たして小学生や中学生に「楽しい授業」を展開することは可能なのだろうか。「古文・漢文」に嫌悪感を抱く教員が、「古典を楽しめる」のであろうか？今最も必要なことは、教える者の「伝統文化に親しむ時間」なのではないか。

3. まとめ—これからの課題について—

本稿では、「伝統的な言語文化」に関する教材を概観し、授業を展開するにあたり、何が必要なかを整理した。これまでの国語科教育、特に古典指導に関しては、中学校・高等学校教材を念頭に置き、指導内容を考え、教材研究の進め方を学ぶことで成立した。しかし、これからは小学校から段階的・系統的に古典学習が施されていることを念頭に置かなくてはならない。特に言語活動例を考慮し、何をどのように指導していくのかを研究していくことがこれからの大学教職課程国語科教育での課題となるだろう。特にアクティブラーニングの手法を取り入れたり、様々な古典の授業を構想するための基礎的な教育も必然的になるかもしれない。

先日中日新聞朝刊に、中学校1年生の授業実践が紹介されていた。⁵それは、平和について話し合わせ、平和の俳句を皆で創作するというものであった。伝統的な言語文化である「俳句」を現代の「平和問題」と絡めて考えながら創作するという実践は、「伝統文化」と「現代」をつなぐ大切な感覚を養うこととなり、非常に画期的な実践ではないだろうか。他にもサブカルチャー教材を利用し、楽しく学習する試みも行われているようである⁶。

このように、授業を考え出し、開発していく発想力を養うことこそ、これからの大学での国語科教育で必要だと考えている。それは、古典に限らない。大学での専門課程を自分なりに深め、「楽しさ」を自身で知ることが大切なのではないか。授業を構想する上でも役立つはずである。実際にどのような授業が構想されるのか、その具体的な調査については別稿に譲りたい。

者の「いま、ここを見つめて―」『明日の授業をどう創るか』(三省堂)平成23年7月 27頁～31頁

(注)

- ¹ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』(東洋館出版社)平成20年8月 23～24頁参照。
- ² 佐藤洋一・室賀美紀「昔話の魅力を生かす「伝統的な言語文化」の授業開発」愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol.5 平成27年3月 45頁参照。
- ³ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』(東洋館出版社)平成20年8月
文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』(東洋館出版社)平成20年9月
- ⁴ 植松雅美編著『小学校国語 みんなで親しむ「伝統的な言語文化」―作品のイメージを育む授業づくり』(東洋館出版社)平成23年9月
- ⁵ 中日新聞朝刊 平成27年10月17日版
- ⁶ 町田守弘「楽しく、力のつく」国語教育の創造―学習